発掘された奥州市展

― 平成 23 年度の発掘成果 ―

奥州市牛の博物館	平成 24 年６月８日～６月 17 日
奥州市埋蔵文化財調査センター	平成 24 年６月 22 日～７月８日
えさし郷土文化館	平成 24 年７月 13 日～７月 22 日

奥州市教育委員会

ごあいさつ

遺跡は歴史を記録する大切な文化財であることから、文化財保護法で大切に保護されています。そのため、遺跡内での開発行為が行なわれる場合、発掘調査による記録を行なう必要があり、当市においても年に数箇所の緊急発掘調査や史跡整備に伴う内容確認調査が行なわれています。発掘の成果は、現地説明会や報告会で公開されるほか、調査報告書としてまとめられていますが、これまで出土遺物を観覧できる機会は限られていました。

そこで、平成23年度に行われた埋蔵文化財発掘調査によって新たに判明した奥州市の歴史を奥州市牛の博物館、奥州市埋蔵文化財調査センター及びえさし郷土文化館で巡回展示し、多くの方々にご覧いただくことにいたしました。

現在、奥州市には約1,100箇所の遺跡が確認されています。この企画展示が郷土の歴史文化に関心をよせるきっかけとなれば幸いです。

平成24年6月

奥州市教育委員会

教育長　佐 藤 孝 守

白鳥舘遺跡第 10 次発掘調査成果概要

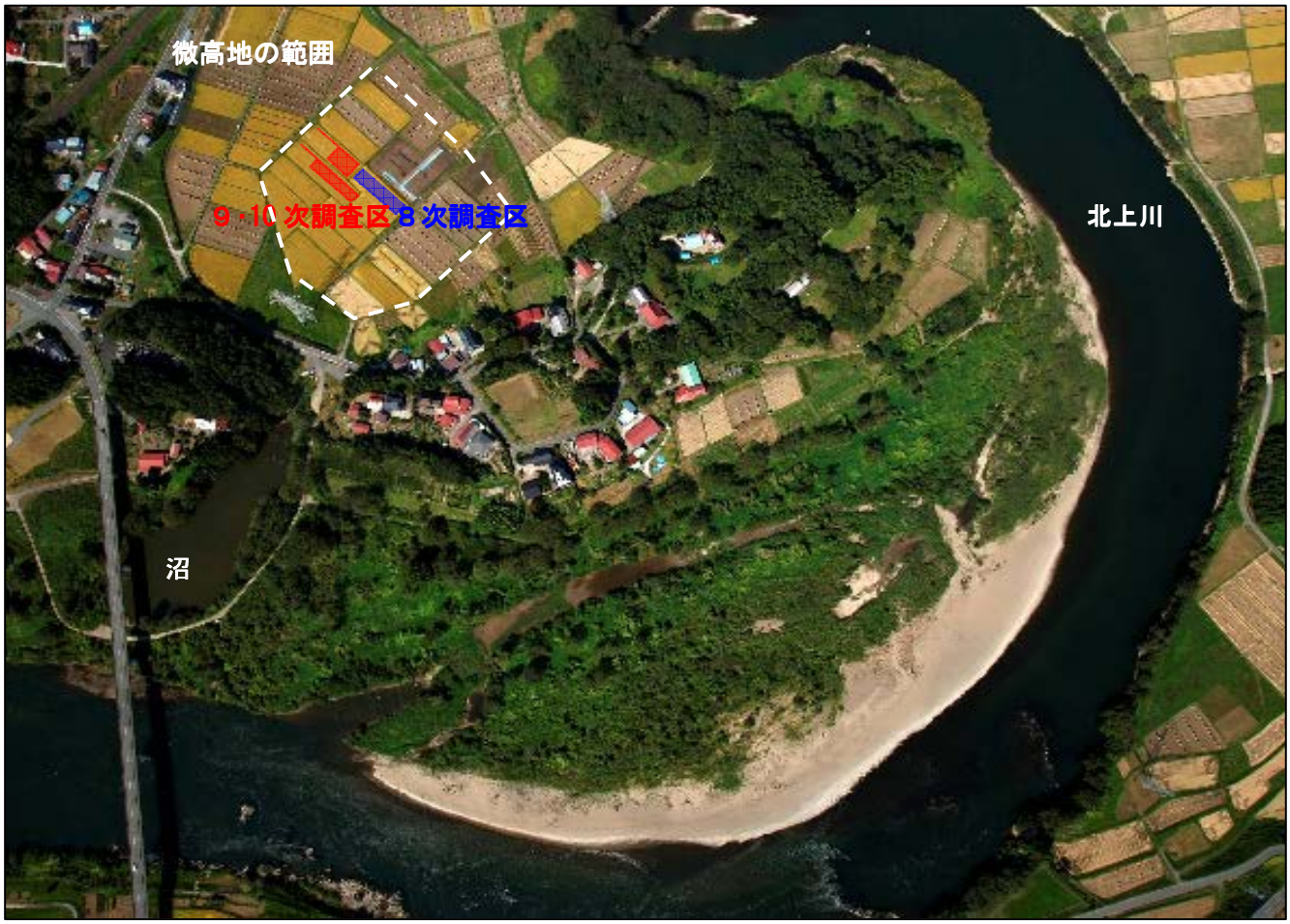
調査地番　奥州市前沢区字鵜ノ木田地内
調査面積　673 平方メートル
調査期間　平成 23 年 5 月 16 日～平成 24 年 3 月 31 日
調査機関　奥州市世界遺産登録推進室

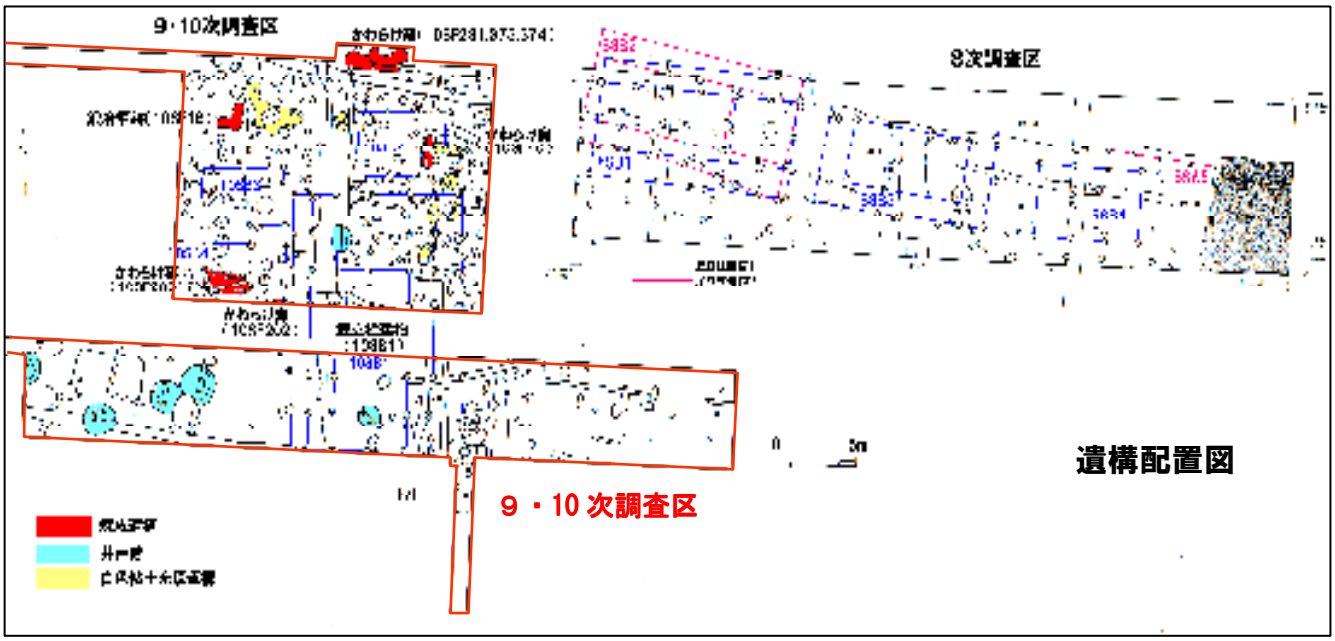
調査成果概要

今年度の発掘調査は、低地部における 12 世紀の遺構分布範囲と内容把握を目的として、昨年度の調査で、鍛冶炉（かじろ）などの手工業生産遺構が確認された地点について、遺構の詳しい調査を行いました。

調査の結果、12～13 世紀初頭の大型の掘立柱建物跡１棟と小規模な掘立柱建物跡３棟、かわらけを焼いた窯（かま）跡と推定される遺構６基、井戸跡６基、多数の土坑や柱穴、溝跡などの遺構とともに、中国産陶磁器（白磁（はくじ）・青磁（せいじ））、国産陶磁器（常滑（とこなめ）、渥美（あつみ）、須恵器（すえき）系陶器（けいとうき））、かわらけ（ロクロ・手づくね）、釘などの鉄製品や鉄塊（てっかい）、鉄滓（てっさい）、銭（聖宋元宝（せいそうげんぽう））や提子（ひさげ）の金具といった銅製品、ふいごの羽口（はぐち）、砥石（といし）、植物の種子などの遺物がコンテナ（60×30×10 ㎝）で約７箱分出土しました。

大型の掘立柱建物は、８次調査で確認されていた３棟の東西棟の掘立柱建物群の西側に位置します。南北７間×東西２間の身舎に庇と縁を持つ南北棟の建物で、これまで見つかっているなかでは最も規模の大きい建物です。３棟の東西棟の建物とほぼ同時期に存在していたとみられ、東西棟の建物３棟と南北棟の建物１棟がＬ字型に配されていたと考えられます。また、これら建物群の前面にあたると思われる遺構の南には遺構がほとんど見られず、庭状の空間であったことが伺えます。さらにＬ字形に配された掘立柱建





物群の北西には、小規模な掘立柱建物が３棟確認されており、工房に関係する建物群と推定されます。工房に関する遺構のうち、かわらけを焼いた窯跡と推定される遺構は、６基確認されました。いずれも、出土品など直接的な証拠は得られていませんが、構造からかわらけ窯と推定されるものです。平泉では窯の構造が分るかわらけ窯の出土例がありませんので、平泉のかわらけの技術系譜を考えるうえで貴重な確認例となります。

今回の調査により、白鳥舘遺跡の低地部には、12 世紀～13 世紀初めごろにかけて４棟の掘立柱建物群がＬ字に配置され、その北西部には、鉄やかわらけなどの製作や加工が行われていた工房、建物群の西側には井戸群が設けられていることが明らかとなり、微高地の西半分における遺構の様相が把握できました。また、かわらけ焼成遺構の出土事例は、平泉のかわらけ生産とあり方を考える上で貴重な資料となりました。今後の発掘調査は、低地の南部と東部について重点的に調査を行い、川湊遺構の確認を進めていく予定です。

大型の掘立柱建物跡

かわらけ焼成遺構

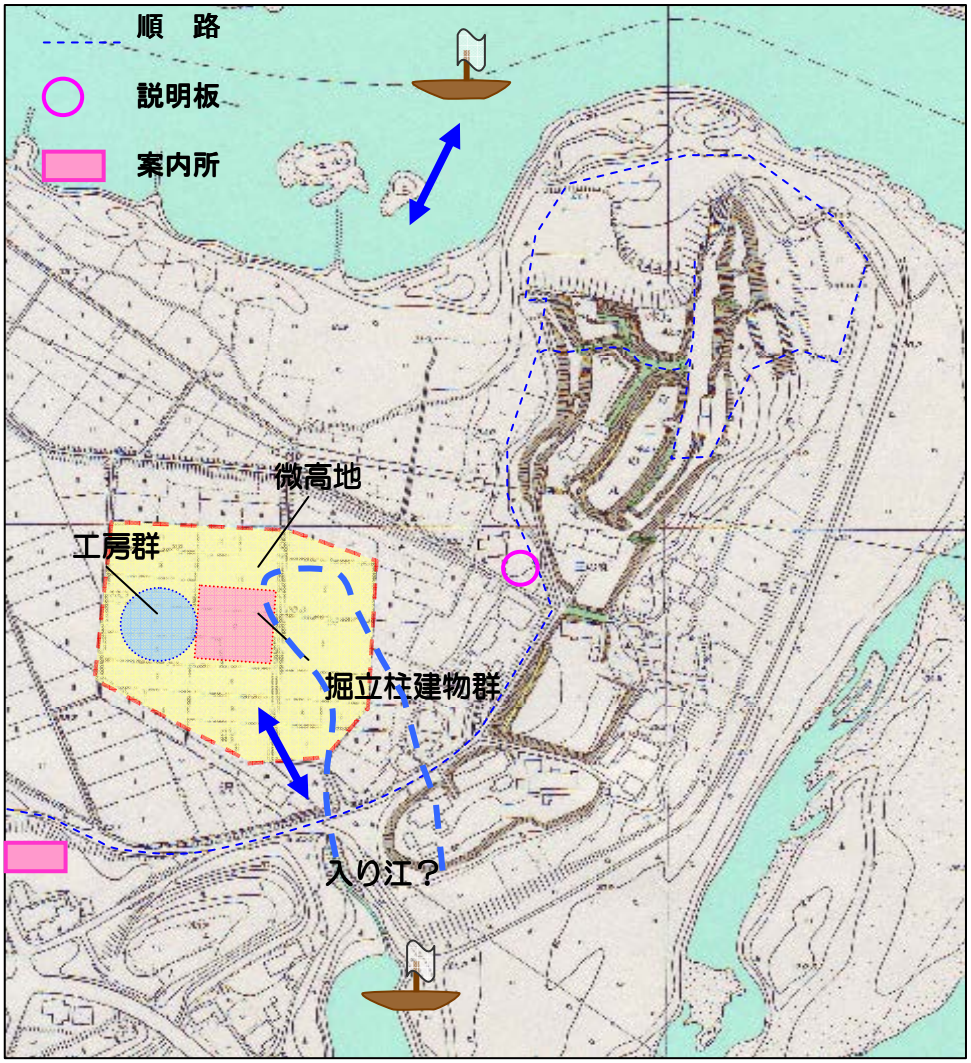
出土した提子（ひさげ）の金具

中世前期の白鳥舘遺跡

白鳥舘遺跡では、近年の発掘調査により、奥州藤原氏の時代である 12 世紀から、鎌倉時代初期の 13 世紀初めごろにかけての様子が明らかになりつつあります。

12～13 世紀の遺跡は、白鳥舘遺跡の丘陵部から南西に位置する標高 23mほどの低地で発見されました。低地の中に区画の異なる一角がありますが、ここは周囲より 50 cmほど標高が高い“微高地”になっています。現在は水田ですが、昭和 30 年ごろまで畑として利用されていました。この微高地の中央部で、12 世紀ごろの掘立柱建物群が発見され、その西側からは、鉄やかわらけなどの製作や加工を行った工房跡群が見つかっています。

掘立柱建物群は、３棟が東西に軒を並べるように配置されています。このうち最も西にある掘立柱建物跡は、東西６間、南北２間で、南と北に庇を持つ細長い建物です。東側の一間は間仕切りがあり、内部にはカマドが置かれていたようです。同じ場所で同規模・同形状の建物が建て直されており、建物群の中でも中心となる重要な建物であったことが伺えます。掘立柱建物群の西側にある工房群では、鉄を溶かした鍛冶炉や、かわらけを焼いたと考えられる窯跡、性格は不明ですが強い火熱を受けている穴の跡などが見つかっており、釘や刀、鏃、火打金などの鉄製品や鉄塊・鉄滓、ふいごの羽口、砥石、かわらけなどが多数出土しています。これに加えて、銅塊や板状の粘板岩（この辺では分布しない）や、水晶製の数珠玉が出土していることから、鉄、かわらけの他に銅や石製品の製作・加工が行われていた可能性があります。また、周辺からは多数の中国産、国産の陶磁器のほか銭なども出土しており、平泉の外周部としては、非常にまとまった量の遺物が出土している点が特筆されます。



このようなことから、白鳥舘遺跡は、奥州藤原氏の時代から鎌倉時代の初期にかけて、鉄や銅、かわらけなどの手工業生産を行う場だったと考えられます。また、このような手工業生産ありかたは、中世の川湊遺跡に共通して見られることが、近年の日本各地の発掘調査によって明らかになってきています。白鳥舘遺跡については、遺跡の地理的な特性などから、これまでも北上川と不可分の関係で成立した遺跡であることが想定されていましたが、手工業生産の存在が確認されたことにより、中世前期の“川湊”である可能性が高まって

います。都市を営むには、手工業生産は必要不可欠なものですが、平泉の中心部においては、このような手工業生産の痕跡が断片的にしか得られてなく、全体像は明らかではありません。白鳥舘遺跡における手工業生産の存在がより明確になれば、都市平泉の研究に重要な影響を与えることとなります。さらに、北上川は都市平泉を支える重要な経済基盤でしたが、平泉とその周辺では、川の利用を示す遺構はこれまで見つかっていません。今後、白鳥舘遺跡が川湊であることが証明されれば、新たな平泉像が描き出されるでしょう。

かわらけを焼成したと推定される遺構

水晶製の数珠玉（じゅずだま）

掘立柱建物群

長者ヶ原廃寺跡第 14 次調査の概要

調査番地　奥州市衣川区田中西 50
調査面積　216 平方メートル
調査期間　平成 23 年 7 月 1 日～平成 23 年 10 月 31 日
調査機関　奥州市世界遺産登録推進室

写真１　長者ヶ原廃寺跡全景（北より）

写真２　西建物跡調査状況（北東より）

長者ヶ原廃寺跡とは　世界遺産・中尊寺の北１km にある、今から約 1000 年前の平安時代中期に建立されたお寺の遺跡です。礎石建物といって、大きな石の上に柱を立て、その上に屋根をかける建物３棟が、築地塀（ついじへい）と呼ばれる土でできた塀に囲まれています。かつては、源義経を平泉に連れてきたといわれる金売り吉次（かねうりきちじ）の屋敷の跡だと伝えられていましたが、発掘調査によって平泉の時代より古いお寺であることが明らかになりました。築地塀は、格式の高いお寺でないと作ることができません。今から約 1000 年前の衣川でそれが可能だったのは安倍氏以外に考えにくいこと、『吾妻鏡』によれば安倍氏一族は衣川に居宅を持っていたと伝えられていることから、長者ヶ原廃寺跡は奥州藤原氏の母方の祖である安倍氏によって建立された寺院と推測されています。

第 14 次調査の目的と成果

３棟ある礎石建物のうち、本堂跡の西側にある西建物跡の性格を明らかにするために行いました。その結果、西建物跡は地面の上に礎石を据えながら 50cm ほどの土を盛り（これを基壇<きだん>といいます）、礎石の上に柱を立て、桁（けた）・梁（はり）を渡し、その上に屋根を葺いたものであることが判明しました。瓦がまったく出土しないことから瓦葺ではなかったようです。基壇の側面は川原石で飾られていたようで、その位置から基壇の大きさは、南北・東西ともに 12.5m であることが明らかになりました。これまでの調査では写真３の●の位置にも柱が立てられていたとされていましたが、今回の調査によって、そこに柱がなかったことが明らかになりました。すなわち、基壇の上には正面から見て４本、側面から見ても４本、合計 12 本の柱だけが立てられていたことがはっきりしました。お寺の建物は通常、●の位置にも柱が立てられるのが普通です。したがって西建物跡は普通とは少し違った建物であることになります。

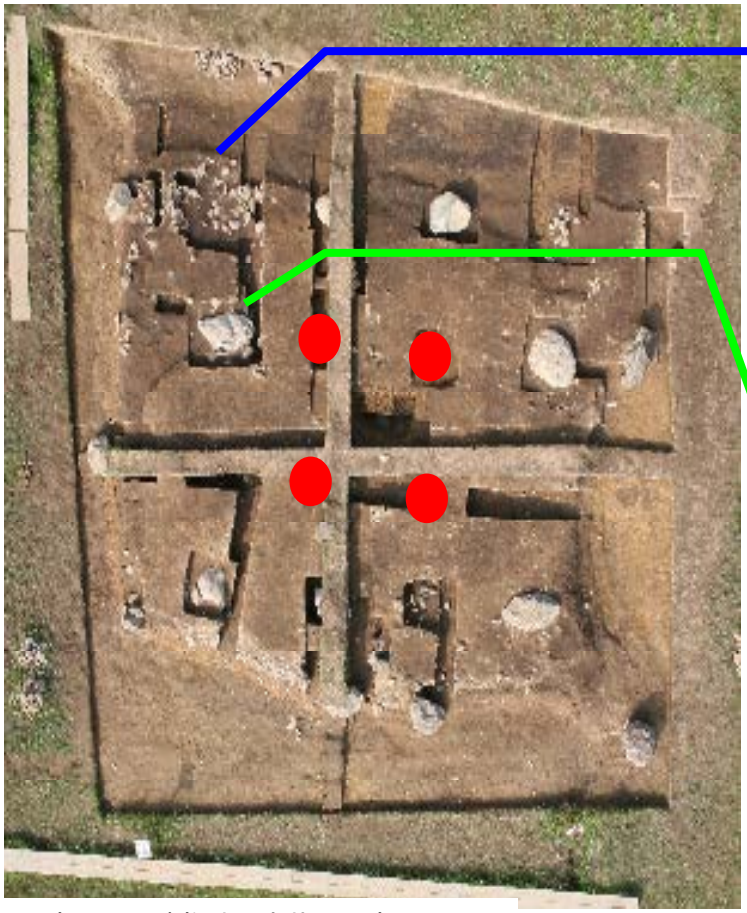


写真３　西建物跡調査状況（真上より）

写真４　礎石が抜き取られた痕跡

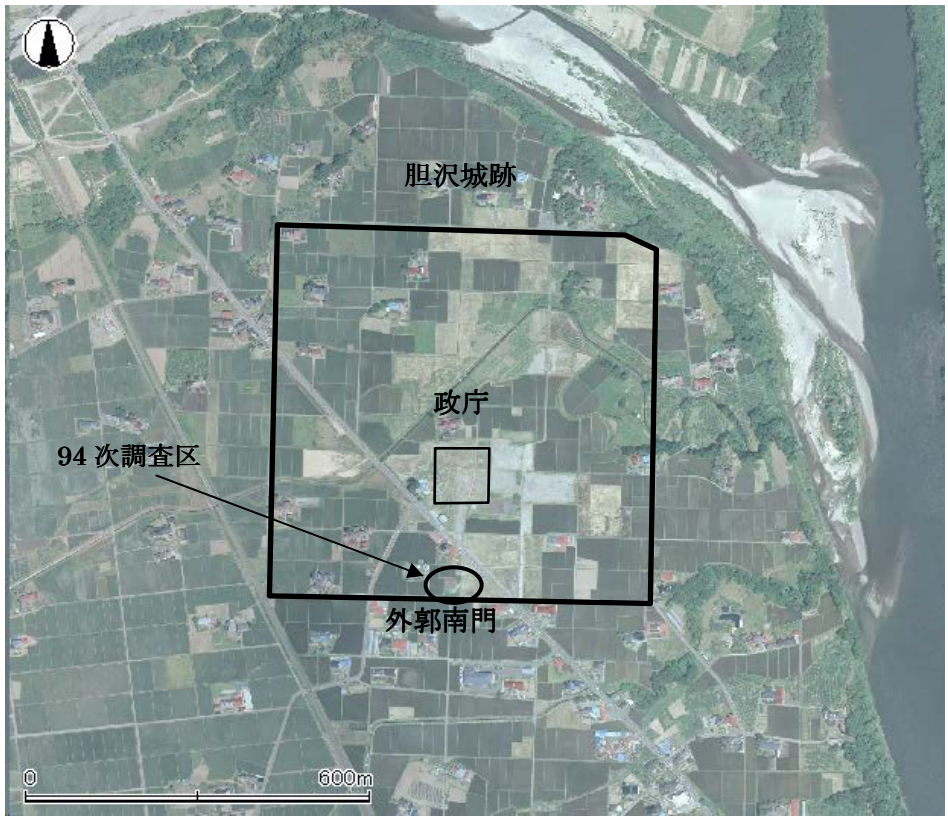
写真５　当初の状態のままの礎石

写真７　基壇の断面。
土が何層も積み上げられているのが分かります

ただ、長者ヶ原廃寺跡と同じ時代の北上市にある国見山廃寺跡（くにみさんはいじあと）では西建物跡と同じ柱配置の礎石建物跡が１棟見つかっていることから、今から約 1000 年前の北上川流域ではよく作られたタイプの建物かもしれません。どんなお仏様が本尊か、あるいはどのような使われ方をしていたかについては、今後の少ない類例を参考にしながら明らかにしていきたいと考えています。

胆沢城跡第 94 次発掘調査

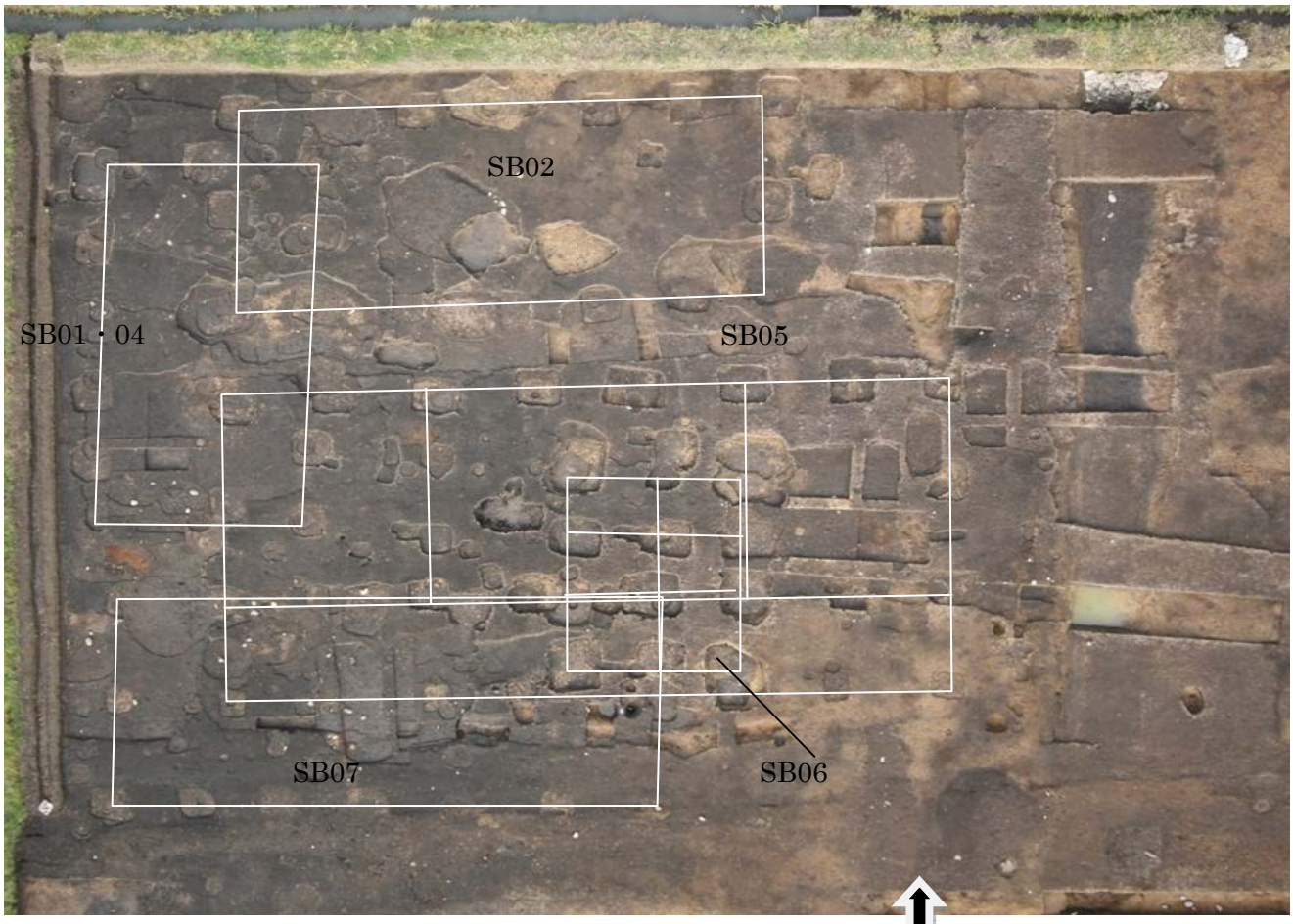
調査地番　奥州市水沢区佐倉河字四月
調査面積　2,260 平方メートル
調査期間　平成 23 年 5 月 26 日～平成 23 年 12 月 27 日
調査機関　奥州市教育委員会

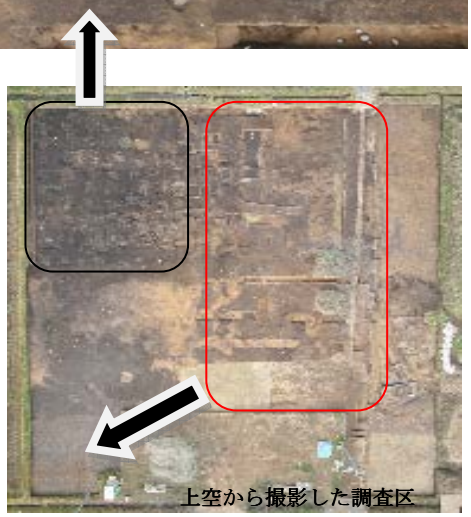


左の写真は胆沢城跡を上空から撮影したものです。外側の枠が胆沢城跡の範囲、内側の四角い枠は政庁跡の範囲、丸い枠内が 94 次調査区です。

左の写真は調査区の俯瞰写真です。調査区は写真中央上方の白線で囲んだ枠内です。写真右下は奥州市埋蔵文化財調査センターです。

胆沢城跡第 94 次調査は外郭南門から政庁へ通じる道路跡の確認と外郭南門北側の様相の確認を目的として行ないました。道路跡の調査は過去に何度か部分的に行なわれ、道路側溝と想定される溝跡を見つけています。今回の調査では、想定どおりに溝跡が連続することを確認するため、調査区を外郭南門周辺に設定しました。調査区は奥州市埋蔵文化財調査センター北へ 180 メートルほどのところです。





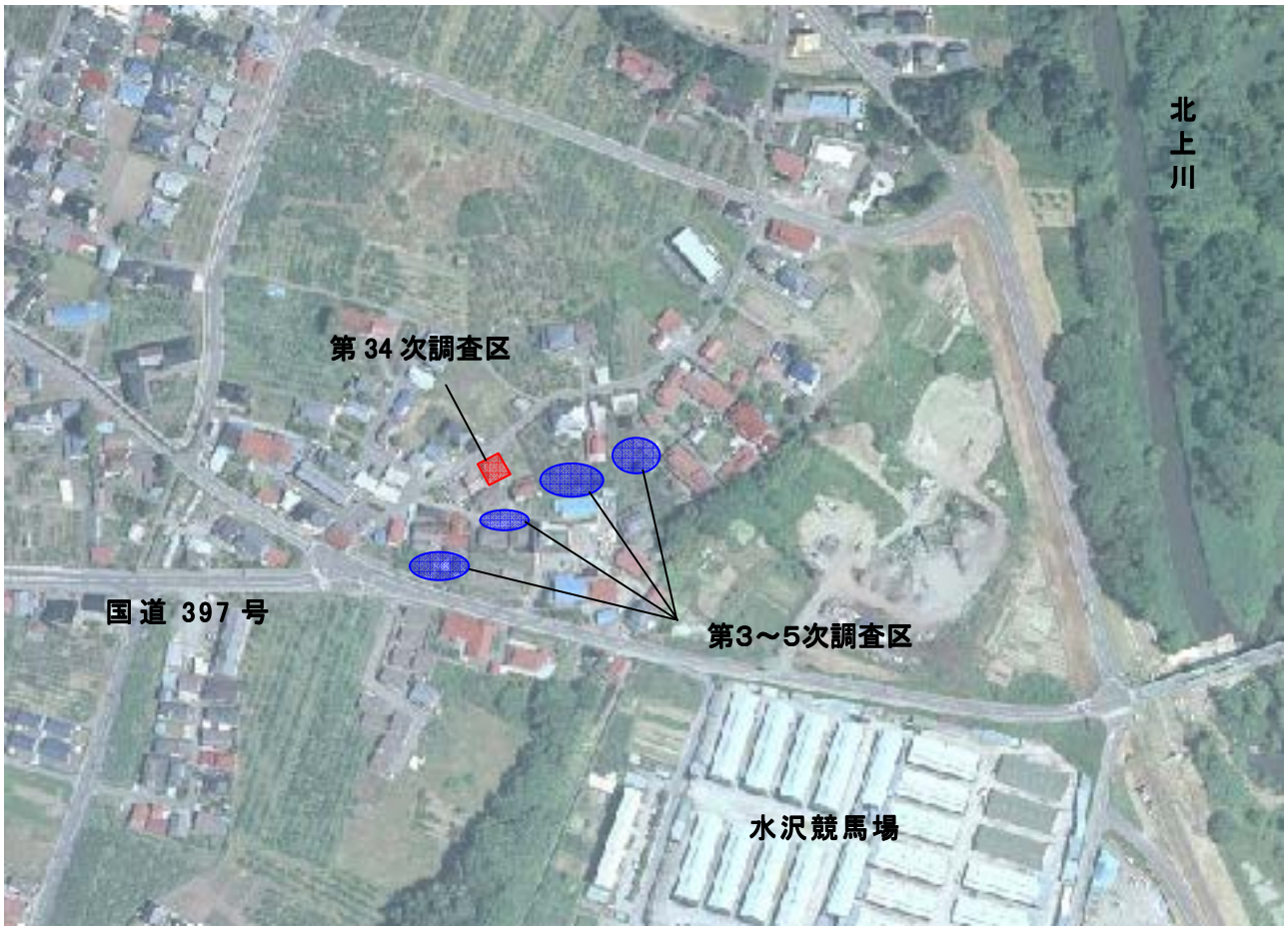
上の写真、白線囲みが掘立柱建物跡です。写真には示していませんが、掘立柱建物跡は工房と考えられる竪穴住居跡を壊して作られています。竪穴住居跡は胆沢城を作る際に使った鉄器を鍛えなおしたりした鍛冶工房の可能性があります。

掘立柱建物跡は建て替えを含めると 6 棟検出しました。SB02・05・06 が比較的古く 9 世紀中ごろ、SB01・04・07 は比較的新しい 9 世紀後半から 10 世紀頃の掘立柱建物跡です。左の写真は外郭南門から政庁へ通じる道路跡です。今回の調査では最低でも 3 回ほど作りかえられていることがわかりました。黒い線で表現しているのが一番古い道路の側溝と考える溝跡です。路面の幅（路幅）は 7.8m ほどです。次の道路は最初の道路の側溝を埋めて周囲よりもやや低くした道路跡で、路幅は 15mほどです。この道路には火山灰が堆積していたので、10 世紀前葉くらいまでは使われていたと考えられます。最後は低い道路跡を埋めて周りの高さと同じにする時期です。道路跡を区画する明確な遺構が見つかっていませんので、路幅は不明です。

調査でわかったことですが、側溝で区画される道路跡と周囲よりも低くした道路跡の中心が、外郭南門の中心よりも西に 2.5m ほどずれます。なぜずれるのか現在検討中です。

杉の堂遺跡第 34 次発掘調査

調査地番　奥州市水沢区佐倉河字杉ノ堂 24－6
調査面積　134 平方メートル
調査期間　平成 23 年 10 月 11 日～平成 24 年 1 月 12 日
調査機関　奥州市教育委員会

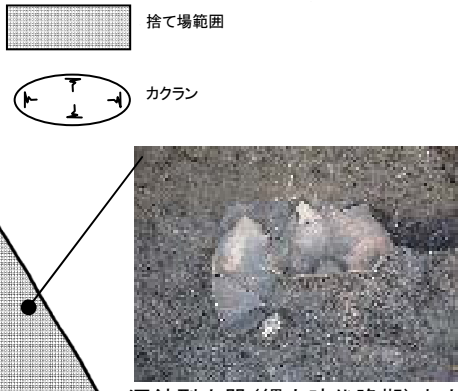


杉の堂遺跡は胆沢扇状地の下位段丘である水沢段丘に位置する縄文後期・晩期、弥生、奈良、平安時代の遺跡であり、昭和 34 年に第 1 次調査が行われました。今回の調査は 34 回目の調査になります。このうち昭和 55 年度から 57 年度の第３次～５次調査では縄文時代晩期の竪穴住居が見つかっており、縄文時代晩期の土器が多く出土しています。今回、第３次～５次調査区のやや西側の地点の調査を行ったところ縄文時代晩期の遺物が非常に多く出土しました。

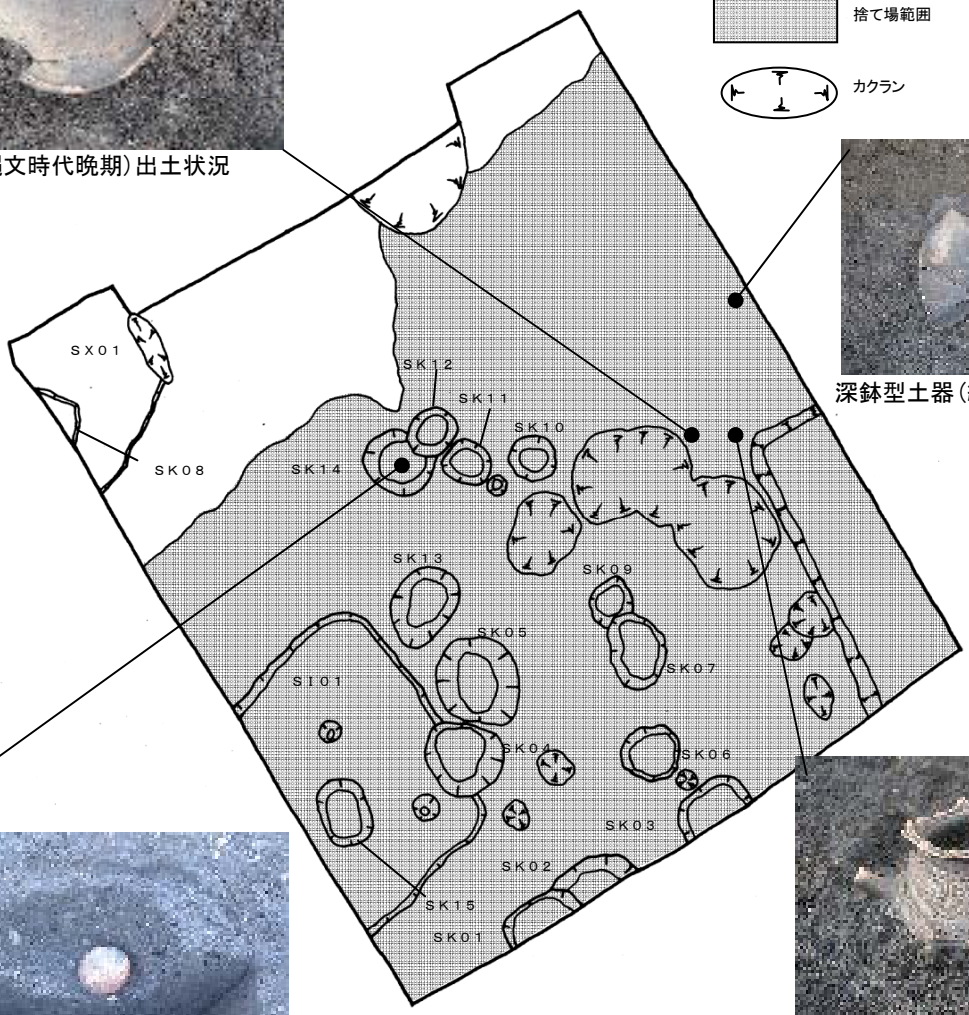
遺構は竪穴住居跡 1 棟、土坑跡 15 基が見つかりました。このうちＳＩ０１竪穴住居跡からは土師器、須恵器、ＳＫ０４土坑跡からは土師器、ＳＫ０８土坑跡からは土師器、墨書土器が出土しているため平安時代の遺構であると考えられます。その他の 13 基の土坑からは縄文時代晩期の土器が出土しているので、縄文時代晩期の遺構であると考えられます。

また、調査区全体から縄文時代晩期中葉～後葉（約 2700 年～2500 年前）の土器、石器、土製品が多量に出土（コンテナ約 170 箱）しており、少量ですが土偶、勾玉、クルミの殻の炭化物、骨片などの遺物も出土しています。遺物や土砂の堆積状況から考えて縄文時代晩期中葉～後葉の捨て場の跡であると考えら

皿型土器（縄文時代晩期）出土状況



深鉢型土器（縄文時代晩期）出土状況



ＳＫ14 壷型土器（縄文時代晩期）出土状況

注口土器（縄文時代晩期）出土状況

れます。捨て場とは当時の人々が使用しなくなった道具を捨てた場所ですが、捨てられた道具から当時の生活をうかがい知ることができます。今回の調査で出土した遺物では、土偶から縄文人の髪型や服装を知ることができますし、補修された痕跡のある土偶や土器から縄文人が道具を大切に使っていたことがわかります。

また、単なるごみ捨て場ではなく使い終わった道具や食料となった動物に感謝をして自然に還す送り場であった可能性もあります。

さらに、土砂や土器を南から北に向かって捨てていることから、今回の調査区の南に縄文時代晩期中葉～後葉の居住域がある可 11 能性が考えられます。

また、平安時代の竪穴住居を検出したことから、縄文時代以降の時代にも生活の場所として利用されていたことがわかりました。

発 掘 された奥 州 市展 2012

－平成 23 年度の発掘成果－

主催：奥州市教育委員会（主管：歴史遺産課）

［会場・会期］

奥州市牛の博物館	平成 24 年 6 月 8 日～6 月 17 日
奥州市埋蔵文化財調査センター	平成 24 年 6 月 22 日～7 月 8 日
えさし郷土文化館	平成 24 年 7 月 13 日～7 月 22 日